自主制作映画

俺たち こんな映画をつくりたい!!

岡大生の中にもユニークな人がいる。映画の自主制作する人たちだ。今回は2つのグループに会っていろいろ話をきいてみた。

その1

まずは教育学部2年の武野工ちゃんを中心にあつまったグループ。

武野くんはもともと『むーびーふれんず四季』という自主制作グループを友人2人とつくっていた。(その2人は今のところTOKIOとKOBEの大学に行ってるそうだ。)『むーびーふれんず』では今まで数本撮っていたそうである。

武野「昨年の夏にも1本撮ったよ。でも、役者があつまらないとかお金の問題とかいろいろあって苦労したなぁー。」

そういうわけで彼はなんとか人を集めなくてはいけないと思い岡山の情報誌をリードする"タウン情報おかやま"に自主制作の呼びかけを載せた。その結果スタッフが20人位あつまったそうだ。主に制作をやりたいと言ってあつまった人が多く、俳優希望は少なかった。/(ここまではだいたい㊎で取材した。)

㊎できいてもようわからん!ということで、岡大新聞・自主制作映画取材班一行(若干名)はぽかぽか日和の3月25日、岡大でロケーションに突撃取材を試みた。

この日あつまった人たちは、

武野工巧(教2)／漁野美由紀(工2)
安藤浩司(工3)／井川徳雄(経2)
永松徹(会社員)／田中久美子(文3)
の皆さん…でした。

卒業式を終えた晴着のお姉さんたちが、こちらの方を物珍しそうに眺めつつ通り過ぎる中、ロケは順調に(?!)行なわれた。

場所は教養A棟西側の池の前。

脚本を書き監督も務める漁野さんが、8mmカメラを構え、役者に対して「もっと!」とかに指示を与える。2時間くらいで休憩。

休憩の時を利用していろいろとインタビューしたのだー!

――ロケはどーなところでしましたか?

㊎「いろんなとこでしました。岡大、喫茶店、草原、公園、鷲羽山、水島、倉敷etc…」

―― 費用とかは…?

㊎「大体全部で7万円くらいかなぁ?フィルムに4万、現像料に2万、あと雑費1万。雑費には車の駐車料金なんかも入ってる。」

―― スケジュールはどうなってますか?

㊎「3月初めから始まって4月いっぱいまではさつえいをつづけるつもりです。」

―― 公開はどういう形で…?

㊎「学館で上映します。5月頃、撮影が終わっても編集・音入れといろいろあるので、たぶんそのくらいのころに上映となるでしょう。もちろん無料です。」

―― 今までの作品はどういう形で公開していたのですか?

㊎「日映研主催の8mmフェスティバルで上映しました。」

―― 今度の作品はどれくらいの長さになりますか?

㊎「ウーンとね、時間にして45～50分くらい。2時間分のフィルムをそのくらいに縮めるんだ、編集の段階で。」

―― 脚本の(映画の)題名はなんですか?

漁野(以下㊎)「"Hot Milkにささやいて"です。」

―― 原作は?

㊎「私がホー稿をかき、あと武野さんと井川さんがホニ稿つまり手直しをしました。」

―― 作品のテーマとかストーリーはどんなものですか?

武野(以下㊎)「そんな一口には言えないナー。まあLOVE STORYあり、いろいろあるんだ。とにかく観てもらわないとわからないよー。」

㊎「私はねェー、やさしい映画をとりたかったの。」

うーんやさしい映画をねー!さすが女の子らしい意見だ。そういう女性の意見とか考えが反映された映画ならぜひ見てみたいなぁ―。

最近はポルノ映画の女性監督がバリバリに活躍してるから、自主制作とかアマチュアの映画製作グループにもどんどん女性が進出して欲しいもんだ。

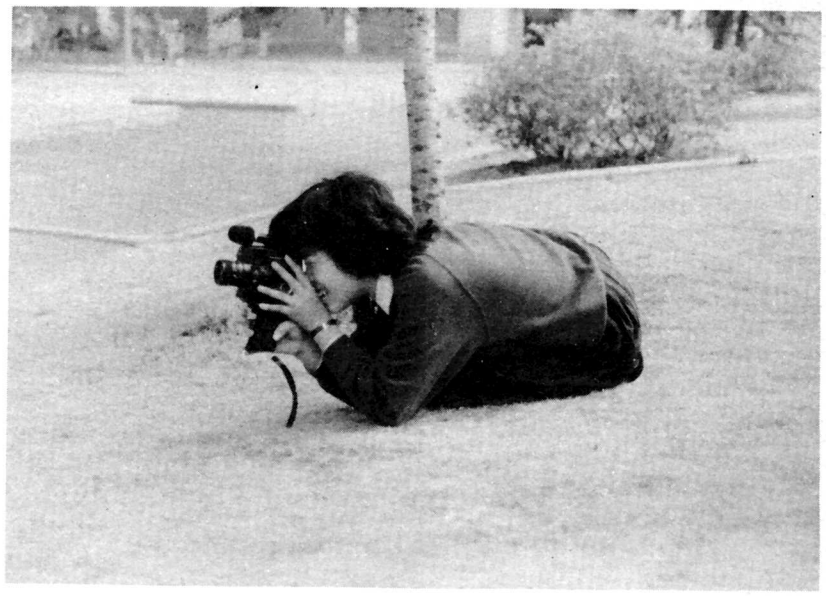
最後に制作上のエピソードとかを聞いてみました。

●「髪の毛をセットするのに30分もかかってしまいましたよ。」映画に出るのにはやはりみだしなみがきちんとしてないといけないもんね。スタイリストは漁野さんがしたそうだよ。一人何役もこなすんだね。感心しました。

●「8mmまわしてて フィルムが入ってないことがありました。」その場面を想像するだけでもおかしいったらありゃしない。

●「女優をあつめるのに苦労したんだ。」女の子の中には映画に出演したいという子もけっこういるみたいだけども、恥ずかしがって自分から積極的に出てくれる人はほんとに少ないみたいだ。で、結局どうしたのかというと演劇部の人などにたのみこんで出演してもらったり、あるいは技術スタッフ希望の女の子を無理やり役者にしてみたり……。

●「けんかなどもなく和気あいあいとできてよかった。」撮影に立ちあったぼくも本当に仲良くやってるなぁという印象を受けました。皆が1つのことをやるために協力しようという基本的姿勢を持ってるから、うまくいったんだろうね。



カメラを持った女性(ひと)って素敵だね!!

自主制作とかぼくらがやっとっても、なんかすごいことをやってるみたいに思われる。困るんやん。

―― そしたら自分たちの自主制作の方針については…?

㊍ まだ一作も制作しとらへんけど、ここで一作成功したら、いつか将来中央(東京・大阪)の方へも出たいなぁって思う。

―― プロになりたいってこと?

㊍ そうじゃなくって東京・大阪で自主上映してみたいということなんや。

―― 8mmカメラはもってるの?

㊍ いやもってへん。でも仏文の教授にかりるつもりなんや。誰も8mmの専門の者はおらへんから、1から勉強して頑張ろうと思う。

―― 映画を通じて何か訴えたいことってありますか?

㊍ うーんそやな…。ぼくらはもともと今の大学生活というものに対して何となく満足できないあるいは物足りないという感じを持ってて、そういった不満とかやるせなさというものを、映画を通じて訴えかけていきたいんや。見る人に共感を持って欲しいなぁ。自分たちの思ってることが映像に反映したらいいと思ってるしね。

―― 映画作りによってそういうやるせなさなどが打ち破れるかもしれないですね?!

㊍ そう、そう!ぼくらのやってることに共感してくれる人がどんどん集まればいいんやけどね。なかなかうまくはいかんわー。

―― 出演者はどうなってるんですか?

㊍ 大体、主演の女の子で決め!ということなんや。で、その女の子のほうは総社に住んでる清心2年の子にたのむつもりなんや。彼女は戸田くんの高校時代の知り合いです。他に3人出演するんやけど、その役は誰がするかまだ決まってへんのや。

それではメンバーの紹介をしよう。

村上卓也(工電子2年)
戸田昭彦(文仏文2年)
伊藤雅子(文仏文2年)

紅一点の伊藤さんは大の映画好き。自主制作に誘われたのも彼女の映画好きが有名であった(?)とか…。なかなかユニークな人ですネ。

―― それでは最後に一言お願いします!

㊍ ぼくらは映画の制作を通して自分たちを変えていこうと思ってる。そして、自分たちの気持ちをスクリーン上にストレートに反映させてゆきたいなァ!それと見る人に理解してもらう(共感してもらう)ということを考えて作らなくてはいけないしね。

学館前にポスター貼ったのにさっぱり集まらへんのや。気軽に映画づくりに協力して欲しいと思います。

▲左より戸田くん、伊藤さん、村上くん

自主制作グループ その2 OUFC

映画自主制作のはなし(その2)はO·U·F·Cです!武野くんのグループとはちがって、O·U·F·Cはスタッフが少ない。たったの3人だ。学館の掲示板に"一緒に映画をつくってみませんか?!"というポスターを貼ってスタッフを募集していたんだが、なかなか集まらなかったそうだ。

言い遅れたけどOUFCというのはOKAYAMA·UNIVERSITY·FILM·CIRCLEの略である。

村上くんに会って直接話を伺いました。

インタビュー

―― どういうきっかけで自主制作しようと思いたったの?

村上(以下㊍)五年の11月ごろかなぁー、クラブの先輩(女の人)が映画をつくろうかなぁーっという話をしてたんや。でも彼女は3回生ということで忙しいし、ワンダルのパーティーのリーダーとかやって忙しくてね、時間的に余裕がなかってなぁーそれで結局断念せなあかんかったんや。

―― それで自分がやろうという気になったの?

㊍ うんそうやな。戸田くんと「それじゃーぼくらがやろうかー」ということになり、戸田くんのクラスの伊藤さんも誘ってみたわけ。

―― ストーリーはどんな感じかな?

㊍ うーん説明したら長くなるから、とりあえずあらすじを言うと、主演の女優というのがあるカメラマンにあこがれて…それからゴチャゴチャと展開するんやけどとにかくで きあがった作品を見てくれたら、わかるって…。

―― 岡山の自主制作について一言。

㊍ ぼくは神戸出身なんやけど、岡山は神戸にくらべたら自主制作とかほんまに少ないなぁ。まあ神戸の方が人口多いからしかたないと思うけど…。それにしてもほんまに少ない。自主制作にかぎらず名作をやるような映画館ってほとんど無いやないか!また高松の方がいい映画がくるのとちがうかな?!

―― うーん確かにそうだね。岡大の人についてはどう思うかな?

㊍ 岡大の人はのんびりした人が多いなぁ。それにはいけないしね。

学館前にポスター貼ったのにさっぱり集まらへんのや。気軽に映画づくりに協力して欲しいと思います。

▲左より戸田くん、伊藤さん、村上くん

幻魔大戦を観てきた話。

角川映画が大嫌いなぼくがどういうわけか観にいってしまった。でも金は一銭も払ってない。ことし無料券が4枚入ったから観にいかないのはもったいないので行ったまでのこと。

もともと期待してなかったが観終ってますます失望した。ストーリーは、「百億年の大宇宙に完全な破壊を―暗黒の支配者・幻魔は、死の触手をついに銀河系にも伸ばしてきた。それで地球のトランシルバニア国の王女ルナ姫は宇宙の意識体フロイからテレパシーみたいなのを受けてエスパーとして目覚める。」このあたりはよくSF小説のネタとして使われるなぁ―、と思いつつ映画を観ていた。「それでもってルナ姫はフロイによって遣わされたサイボーグ戦士ベガとともに同士を求めて宿がたつ。最初に見つけたエスパーは平凡な高校生のジョウ。彼は突然自分の潜在的超能力に驚く。その後ごちゃごちゃ話があって同士のエスパー数人で幻魔に戦いをいどむ。幻魔に体が凝固する光線のようなものをかけられたジョウはもうこれまでかと思われた。しかし、殺された彼の姉の念の力がジョウの体の内部に湧けおこり反撃する。」ここで幻魔は滅んだかのようにみえたが実は滅んでなかった。大体どのSFでも悪玉というのはなかなか滅びずしつこくよみがえる。結局最後には皆の超能力の力を集結してやっつけるんだけど、なんとなく神宇忍者隊の火の鳥を思い出してしまったのはこのボクだけだろうか…?!

ストーリーは多少の枝葉があるものの一本筋でシンプルなものだった。もう少しひねりを加えて欲しかったナー。それと確かに絵はきれいだったけど(りんたろうが監督)も何か訴えかけてくるものが乏しかったように思えた。

さんざんけなしたけど、この文に反論がある人がいたらいつでも言ってきて下さいネ!(げんま たいせん)

P.S 幻魔大戦よりも同時上映のバンデットQの方がおもしろかったと感じたのはボクだけだろうか?!それにしてもアニメーションはどうも浅くてなじめないなぁ。大人ぽいアニメはないのかなぁ?